

崇禅寺駅員として体験した空襲



石井 富恵（いしい とみえ）さん（86）昭和4（1929）年 大阪生まれ。  
9人兄妹の5番目の次女として生まれる。16歳で京阪神急行電鉄（現・阪急電鉄）へ入社し、配属されていた崇禅寺駅で昭和20（1945）年6月7日の第3次大阪空襲に遭遇。壮絶な爆撃の中を逃げて生き延びた。戦後70年に際し、自身の経験を手記にまとめた。東淀川区在住。

<取材メモ>

東淀川が空襲の被害を受けた昭和20（1945）年6月7日に、阪急崇禅寺駅で改札業務をしていた石井さん。本事業で戦争体験を募集していることを知り、当日の体験を便箋10枚の手記として東淀川区役所へ届けてくださった。インタビューでうかがったお話と合わせてまとめたものが本稿である。

肌寒かった6月7日の朝

昭和19（1944）年9月に、京阪神急行（現・阪急）に入社しました。7人応募して、当時16歳だった私と、近所に住んでいた伊藤さん（17歳）、千国山の土井さん（14歳）の3人が採用されました。その頃から戦争が激しくなっていました。

昭和20（1945）年6月6日は、南方駅の手前で焼夷弾がボンボン落とされていました。崇禅寺駅にいた私は、それを「明日こわいでー」と思いながら見ていま

した。

翌日6月7日の朝7時30分のことです。空襲警報が鳴り、電車が止まりました。踏切番のおじさんが大きなバケツに火のついたカラ消しを入れて、お昼の弁当をあたためておられました。「玉川（注：石井さんの旧姓）、火にあたりなさい」と言われたので、兵隊さんとおじさんと3人で火にあたっておりました。少し肌寒い日でした。

兵隊さんはこの近所の人らしく、戦地に行く前に家族にお礼を言いに来られていました。その後1時間ぐらいしたら、飛行機の爆音がしました。この頃は、毎日アメリカの飛行機が、京都に向かって私たちの上を飛んでいましたので、その音だと思っていました。ところがいつもと音が違うので今日の音はおかしいと思ったとたん、「ゴウーっ」と、「ゴウー グワーン」となりました。何が起きたのか分からず、そのままその場にしゃがみこみました。5秒ぐらいすぎて目を開けますと、真っ暗で何も見えません。

二度三度と目を開けましたが、まだ見えません。そのうち、やっとあたりが見えるようになりました。踏切番のゲレット（※詰所もしくは待機所のような小屋）の窓ガラスは棧ごと無くなって、掛かっていた大きな丸い時計も飛んでしまって無く、いつもお昼のお弁当を温めていたカラケシを入れたバケツはひっくり返って中身は散らばっていました。

いつの間にか、私の右手首のところから、血がダラダラと滴り落ちていました。一緒にいた兵隊さんは、そのあたりが暗いうちにどこへ行かれたのか、姿が見えず、いなくなっていました。ふと我にかえて、駅員としての責務を思い出しました。切符の束や売り上げの入った黒いかばんが気になって、私のゲレットへ走りました。すると窓はなく、骨だけで、切符もお金も裏のホームの水源池の手前に転がっていました。もう少し飛んでいたら、水源池に入ってしまっただけで見つからないところでした。そのあたりは、南方駅の手前あたりから淡路駅の手前までの広範囲に深さ2メートル、幅2メートルくらいの水源池が広がっていました。黒いかばんを拾い上げて、私のゲレットに戻ろうとすると、アメリカ軍の飛行機が1機で飛び回ってきました。私の専用の防空壕に入ろうとしたら、中には近所の人が入っていて、入れません。仕方がないので、入り口の人の背中へくらいついていました。外からは私の背中が丸見えの格好になり、いつやられるかわからず、びくびくしながら時間が経つのを待ちました。右をみると、近所の水源池と水源池をつないでいる陸橋の下に、近所に住んでいた住友金属の夜勤男性がネルの寝巻き姿で立っていました。その寝巻きから血がダラダラと流れているのが見えました。すると、間もなく「ドドオーッ」と地震のような振動がして、防空壕の内壁がザラザラッと落ちました。防空壕と言っても、土を掘ってあるだけです。中

の広さは畳1畳ぐらいです。

すると、防空壕の奥から「アイゴー、神様タスケテください」「アイゴー、神様タスケテください」「アイゴー、神様タスケテください」という声が3人から聞こえました。近所に住んでおられた韓国の人です。

私はすぐに踏切のおじさんのところへ行こうと頭を上げますと、防空壕のすぐ上は焼夷弾でぼうぼうと燃えていました。焼夷弾は、落ちたところと火の粉が飛んだところはよく燃えます。それを見て一旦、足がすくみましたが、逃げないのだめなので、立ち上がって踏切のゲレットへ行こうとしたら、馬を下水の橋の下へ入れて逃げてきた馬方さんを、馬が追いかけて上がろうとしていました。私はそれを尻目に踏切を渡っていたら、飛行機の音がしたので、「あっ、敵機だ」と思って何か隠れる物を探して左を見たら、電信柱が1本あったのでそこへ行き、顔を前にすぼめて隠れておりました。

### 履きなれない下駄で避難

まもなく飛行機は行ってしまったので、踏切のおじさんから「淡路へ逃げよう」と言われたので、走りかけたら、線路の右側に直径10メートルぐらいのアリジゴクが出来ていました。そのほら穴には、自転車が1台はまっていました。人影はありません。

私はその日、下駄をはいていました。京都行きの改札を担当していた伊藤さんが、その日の朝に「今日は身体検査があるので京都へ行きますが、下駄を履いてきてしまったので、靴を貸して」と言われて貸していました。私は靴と交換した伊藤さんの下駄を履いて逃げるのです。その下駄は炊事場用ではなく、歯の薄い高さのある下駄でした。まともに歩けません。P51が1機で追いかけてきますので、2人で線路の上を歩いたり、細い道へ降りたりしながら、淡路へ向かって走っていました。そしてうっかり、30センチぐらいのドブ川に足を入れてしまいました。足を上げると、下駄が片方ないのです。そのまま片足だけ下駄をはいて、淡路の近くまで行くと、左側に長屋があったので、隠れることができないかと近づくと、ナツパ服に赤腕章をはめた警防団の人が私たちに向かって、「あんたら、そこらうろろせんといて、あぶないやないか。あっちへ行け」と言いました。がっかりして少し行くと、左側に麦畑があったのでそこへ入りました。しかし、人がたくさんいて、隠れても意味がありません。座り込んでいたら頭がやられるなど思って寝そべると、今度は足をやられるかなと思って、座ったり寝そべったりを繰り返していました。すると、背中へバラバラと何かがかかりました。私は「やられた！おかあさん、サヨナラー」と言って、スウーっと意識がなくなりました。

## ⑨石井富恵さん

そして数分経った後でしょうか。「玉川、逃げよー」というおじさんの呼ぶ声で気がついて、頭を上げました。「ヤアアアー、助かった、ありがとう」と言って、淡路の駅の方を見ましたら、淡路駅の駅長さんが、1号線に停まっていた十三行きの電車の屋根に上がって、焼夷弾の火を消しておられました。この駅長さんは、各駅の視察巡回に行かれる時に首を振って歩かれるので、「首ふり駅長」というあだ名がついていました。

おじさんは「ここも危ないぞー、向こうへ行こう」と言いました。淡路駅は、梅田方面行きと、天六方面行きの2つに線路が分かれていました。片足は裸足で、片足は下駄をはいてカタシュ、カタシュウと鳴らしながら歩いて2筋の線路をこえて、東淡路の商店街へ行きました。商店街の入り口に着いて、びっくりしました。建物は下がお店で、2階が住まいになっていましたが、その2階の住まいの窓ガラスが全部ないのです。アメリカ軍の機銃掃射か、爆風のしわざだったのでしょう。

商店街の通りが、こっぱみじんに割れたガラスの破片で絨毯を敷いたようになっていました。その上を、片方の下駄も捨てて裸足で歩きました。商店街を抜けたところで、おじさんは「わしは京都へ帰るから、ここで別れよう」と言い、上新庄駅の方へ向かわれました。私は阪急吹田駅の方へ歩き始めました。まわりは静かで、稲の穂が6分ぐらいの高さになっています。「この静けさは何だろう。今まで何があったのか」と思いながら、真っ黒の顔のまま、裸足でとぼとぼと歩きました。

## 父親がつくってくれた昼食

吹田駅に行きますと、駅員さんが迎えてくれました。「崇禅寺駅がやられたと聞いたが、よく無事だったね。顔が真っ黒だ。顔を洗いなさい。タオル貸したげよ」と言ったあとで、「これ履き」と出してくれたのは、ハワリ（※板草履？）といって、畳草履の裏に横幅5センチ、長さ3センチ、高さ2センチぐらいの木板が4つ貼ってある履物を貸してくれました。そのヤツワリを履いて、歩いて10分ぐらいの自宅に帰りました。すると、住友金属に勤めていた父が、「日本の憲兵が来て、日本がこの戦争に負けるから仕事にならないと言われた」と会社から帰ってきていました。父は「お前、幽霊と違うか、崇禅寺の駅がやられたと聞いたが、爆弾と駅と一緒に吹っ飛んだと思っていた。足あるか」と私をしげしげと眺めました。「お父さん、私は大丈夫だったよ」と言うと、「そうか良かったなあ」と安心したようで、「お昼のごはんは食べたか?」。「私はまだです。朝の7時半に空襲警報が鳴って電車が止まったので、弁当は来なかった」と答えると、「お昼ご飯出したらげよ。一服しなさい」と言い、父の炊いてくれたお昼ご飯をいただきますと思っ

## ⑨石井富恵さん

て見てみると、青い“お菜っ葉”ばかりで、米粒は探さなければなりませんでした。それをいただいて、夕方の5時に淡路駅へ通勤のために行きました。電車が止まっているので、歩いて行きましたが、神崎川の鉄橋がどうしても渡れなくて、川の3分の1ほどのところまで行ったり来たりしておりましたら、前を渡っていた中学生が戻ってきて、私の手を引いて渡ってくれました。淡路の駅へ行きましたら、駅長が私を見てびっくりした様子で、「玉川、生きていたか。駅員に見に行かしたら崇禅寺駅はゲレットがつぶれていたし、爆弾と一緒に吹っ飛んだと思っていた。よく助かったなあー」とおっしゃいました。そこでも一服しなさいと言われて、上がりますと畳の部屋が一室あり、女性の駅員さんのずぶ濡れの遺体を2体寝かしてありました。私は一礼して奥へ行きました。

## 謎の乗客

空襲後も、しばらくは崇禅寺駅の勤務が続きました。電車があまり来ない時間帯に、ひとりで勤務していた時のことです。京都行きの電車が来ましたので、走って向かいの改札に渡って立っていますと、電車から降りて来られたお客様の中に、洋服ダンスを縦に割ったような人間の高さくらいの物が2つ見えました。何を運んでいるのかと思いながら見ていますと、電車は行き、私の前にその大きな物が止まりました。そのとたん、ぱっと中身が開いたので見てみると、中には素っ裸の人が2人入っていました。男性か女性かだったかは分かりません。そして、すぐに閉じられてしまいました。よく見ると、灰色の布団を頭から巻いておられたのです。私はびっくりしてしまいました。切符のことは言わずに通しました。その方たちも黙って通っていかれました。私は心の中でその人たちに頭を下げました。服は焼夷弾で焼かれたために裸だったのではないのでしょうか。悲しい思い出です。

## 8月14日と15日の淡路駅にて

後日、勤務地が淡路駅に変わりました。私はそこで改札係をしていました。8月14日のことです。「ボンボン」と音が聞こえてきましたので、「今どこがやられておりますか」、と駅員さんに聞きましたら、「今は大阪の森ノ宮だ」と教えてもらいました。この日、森ノ宮にいた12歳くらいの学童たちが、大勢亡くなりました。なんという悲しいことか。あと一日早く終戦していたら、彼らは死ななくてよかったのにとすると、残念でした。

8月15日のお昼には、ラジオから天皇陛下の泣いている様な、のどのつまるようなお声で「日本国が戦争に負け、アメリカに降伏をする」という放送が流れてきました。日本はどうなっていくのかと不安でいっぱいでした。しばらくすると、

## ⑨石井富恵さん

近くの会社の人たちが改札にやって来て、長蛇の列ができました。日本が負けて、仕事にならないのでみな帰宅するために駅へ来たのです。

みな、私たちに「あんたらアメリカが入ってきたら何をされるかわからんよ。怖いから、気をつけや」と言って、肩をポンとたたいて通っていかれました。

崇禅寺で体験した空襲は、私の人生で一番恐ろしい体験でした。今でも昨日のことのように思い出します。戦争は絶対にダメですね。